

桜島大正噴火きょう111年

「噴火慣れた」専門家警鐘

教訓生かし防災を

20世紀で国内最大の噴火とされる桜島の大正噴火から12日で111年。始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部には、大正噴火当時と同等量のマグマが蓄積した状態という。鹿児島市や垂水市では11日、大規模噴火に備えた防災訓練があり、市民が火山の現状や避難行動について学んだ。専門家は「過去の教訓を生かすため、一人一人が大正噴火のことを知っておくべき」と話す。

「本島ノ爆発ハ古来歴史ニ照シ、後日復亦免レザルハ必然ノコトナルベシ」
鹿児島市の東桜島小学校に立つ石碑は111年前の噴火を伝える。群発地震や地鳴りなどの前兆があり、島民2万人の多くが事前に

避難したが、「噴火なし」とした測候所の判断を信じ、島に残った人が犠牲となった。「住民ハ理論ニ信頼セズ」の文言から「科学不信の碑」とも呼ばれる。鹿児島大学の井村隆介准教授（火山地質学）は「将来また起こるという過去からのメッセージ」とし、「県民が小さな噴火に慣れすぎ、大正噴火の規模をよく知らないことが一番の問題だ」と警鐘を鳴らす。「新燃岳の噴火（2011年）が今の桜島の10年分、大正噴火はさらにその100倍の規模」と説明する。

大正噴火は東西の山腹で噴火が始まり、活動は1年半続いた。大量の軽石が鹿児島湾に噴出し、雨が降るたびに陸地から流出した。現代では船舶の航行が難しくなることが想定される。京都大の井口正人名誉教授（火山物理学）は「大規模噴火前に島外避難することが必須。確実に避難指示を出さなければならない」とした上で、「除去に10年かかるほどの大量の降灰が県内のどこかにある。全体的に考えておかないといけないが、その議論は進んでいない」と指摘する。

1914年1月12日午前11時半ごろの大正噴火の様子（鹿児島県立博物館蔵）
井村隆介鹿児島大学准教授がAI技術を使ってカラー化したもの



噴石、溶岩などの総量は約20億立方メートルに上り、大隅半島と薩摩半島に及んだ。島民約2万人の多くは避難したが、当日まで残っていた29人が犠牲になった。対岸の鹿児島市側では家屋や石塀の倒壊、土砂崩れが相次ぎ、29人が死亡。小規模の津波も起きた。

Q ズーム
桜島大正噴火
1914（大正3）年1月12日午前10時すぎ、桜島の東西山腹で噴火が始まり、約8時間後の午後6時半ごろ、鹿児島湾を震源とするマグニチュード7・1の地震が発生した。火山灰や

民が小さな噴火に慣れすぎ、大正噴火の規模をよく知らないことが一番の問題だ」と警鐘を鳴らす。「新燃岳の噴火（2011年）が今の桜島の10年分、大正噴火はさらにその100倍の規模」と説明する。



【問1】 桜島の大正噴火は、いつ起きたのでしょうか。

【問2】 桜島の大正噴火は、どんな噴火とされると書かれているでしょう。

【問3】 鹿児島市や垂水市では、2025年1月11日に何があったのでしょうか。

【問4】 111年前の噴火では、どんな人が犠牲になったのでしょうか。

【考えてみよう】 桜島の大きな噴火に備えてどんなことが必要か、家族や友達と話してみよう。

むずかしい漢字とことば

噴火(ふん・か) 始良(あい・ら)
湾奥(わん・おう) 蓄積(ちく・せき)
垂水(たる・みず)
大規模(だい・き・ぼ)
避難(ひ・なん)
専門(せん・もん) 石碑(せき・ひ)
地震(じ・しん) 犠牲(ぎ・せい)
理論(り・ろん) 信頼(しん・らい)
呼(よ)ばれ
准教授(じゅん・きょう・じゅ) = 大学
や高等専門学校などの教員で、教授
につぐ地位の人。
将来(しょう・らい)
警鐘(けい・しょう)を鳴らす = 何か
問題が起こりそうな時に、危険を知
らせ、警戒をうながすこと。
新燃岳(しん・もえ・だけ)
山腹(さん・ぶく) = 山の頂上とふも
との間。山の中ほど。
降(ふ)る 船舶(せん・ぱく)
難(むずか)しく
名誉教授(めい・よ・きょう・じゅ) = 大
学や高等専門学校などで教授とし
てつとめた人や、特に学術上のす
ばらしい功績があった人へ、退職後
に贈られる称号(しょう・ごう)。
除去(じょ・きょ) 降灰(こう・はい)
指摘(し・てき) 震源(しん・げん)
襲(おそ)う 石堀(いし・べい)
倒壊(とう・かい) = たおれこわれる
こと。
地滑(じ・すべ)り
状況(じょう・きょう)
異(こと)なる
柔軟(じゅう・なん)
巨大(きょ・だい)
耐震(たい・しん)
対策(たい・さく)